

## はじめに

sattva は「衆生」を意味する原語の一つだが、訳語は「衆生・有情」に限らず、その意味は広く多様である。

パーリ語 satta は sattva のみならず、sakta, satvan, sapta, śapta 等のサンスクリット語も表す。サンスクリット写本でも sattva を satva と書写される場合が多い。

こうした問題点を含めて、思想上重要な sattva とその関連語について、各文献における sattva の解釈を試み、以下の点を検討する。

### 1. ウパニシャッドの sat, sattva, satya、サーンキヤの三要素(tri-guṇa)説の sattva

sat: 『リグヴェーダ・サンヒター』の創造神話に端を発する sat(有)は『チャンドーギヤ・ウパニシャッド』第6章におけるウッターラカの根本原理であり、sat は三神格(熱・水・食物)を発生するが、この説はサーンキヤの三要素説の起源と考えられている。さらに第7章のサナトクマーラの説では、アートマンからの世界展開において sattva-śuddha が説かれる。この sattva-śuddha は『スッタニパータ』435における“sattassa suddhatam”との関連が指摘されているが、この詩句を伝承する『マハーヴァスツ』や『ラリタヴィスタラ』には句が改変されている。

satya: ウパニシャッドでは satya は sat+tyam(=sattiyam), sa+ti+yam, sat+ti+yam(=sattiyam)、すなわち、「真と偽」「不死と応死」からなる語源解釈がなされる。

### 2. sattva と bhūta, mahad bhūta と mahān ātmā, buddhi と sattva

私見によれば、諸々の存在物について、ウパニシャッドでは bhūta (pl.)、仏教では sattva (pl.) をもって示す傾向がある。sattva の辞書の定義と漢訳語を比較すると、bhūta の漢訳が sattva の定義に対応する傾向が見られる。

また、『カタ・ウパニシャッド』6・7では、buddhi の位置に sattva を立てることが知られる。

『ブリハッド・アーラニヤカ・ウパニシャッド』では sattva の用例はないが、ヤージュニヤヴァルキヤの説く“mahad bhūtaṃ, mahān ātmā”とともに、mahat の意味を考察する。

### 3. 仏典の sattva

大乘仏典において菩薩(bodhisattva)と併記される大士(mahāsattva)の mahat の意義を上述の議論を踏まえて検討する。

説法躊躇から梵天勸請における sattva の用例として『マハーヴァスツ』が伝承する4種の梵天勸請の内容が注意される。

『ブッダチャリタ』では、出家後の当座の師であるアーラダ・カーラーマからサーンキヤ思想の教示を受けるが、第12章以外にも三要素説は散見し、仏教的変容を示している。

キーワード：sattva, ウパニシャッド, 梵天勸請